



さがみがわ あゆ さんらんじょうぞうせい 相模川におけるアユの産卵場造成

あゆは 10～12月に産卵期を迎え、生まれた仔魚は海に流れ着き、翌年3～5月になると稚魚が遡上し、釣りの対象となります。

アユの産卵場は河川の中下流域において、川底に泥がなく、きれいな砂利が柔らかく積み重なっている水深10～60cmの瀬（流れがあり浅い場所）に作られます。

多くの卵を産んでもらいアユの資源を豊かにするために、県内河川ではアユの産卵場造成が行われています。

産卵場造成は、アユの産卵に適した条件を整えるため、従前から川底を柔らかくする河床耕耘が行われています。また、水のない河原などに人工的に水路を造ることで産卵場を造成する方法もあります。人工水路による産卵場造成のメリットは、産卵に適した水深や流速の条件を確保しやすいこと、さらに、元々水のない場所でも河川水を引き込むことで新たな産卵場の面積を増やせることにあります。

今年の産卵期には、神奈川県内を流れる相模川で人工水路による産卵場造成が行われました。水の流れていない河原を重機（写真1）で掘削してから、人力（写真2）で耕耘して幅5m、長さ70mの人工水路（写真

3) を造成すると、数日後には親アユが集まり、産卵行動が観察され、多くの産着卵が確認されました。(写真4)

近年、ダムや河川改修による河川環境の変化で、アユの産卵に適した砂利が少なくなるなどして、自然の産卵場が減少することが懸念されています。今後は、今回得られた知見を基に、産卵に適した砂利を人工水路に投入するなどして、更なる改良を加え、より効果的な産卵場造成を検討し、アユの資源を豊かにすることを目指します。

かながわけんすいさんぎじゅつせんたーないすいめんしけんじょう しゅにんけんきゅういん あいざわ やすし
神奈川県水産技術センター内水面試験場 主任研究員 相澤 康



しゃしん じゅうき くつきく ようす
写真1 重機で掘削する様子



しゃしん じんりき こうらん ようす
写真2 人力で耕耘する様子



しゃしん こんかいぞうせい じんこうさんらんじょう
写真3 今回造成した人工産卵場



しゃしん ぞうせい じんこうさんらんじょう かくにん あゆさんちやくらん
写真4 造成した人工産卵場で確認されたアユ産着卵